



**Ginette
NEVEU**

plays

BRAHMS



Violin Concerto

Conductor :

Hans Schmidt-Isserstedt

Sonata No. 3

Piano : *Jean-Paul Neveu*

ジネット・ヌヴェー

Ginette NEVEU plays **BRAHMS**

ブラームス

Johannes Brahms 1833 - 97

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77

Violin Concerto in D major, Op. 77

- ① Allegro non troppo 22:19
- ② Adagio 9:46
- ③ Allegro giocoso 8:02

指揮: ハンス・シュミット=イツセルシュテット

Hans Schmidt-Isserstedt

北西ドイツ放送交響楽団

NWDR-Sinfonieorchester

Live: 3 May 1948

ヴァイオリン・ソナタ 第3番 二短調 作品108

Violin Sonata No. 3 in D minor, Op. 108

- ④ Allegro 8:04
- ⑤ Adagio 4:54
- ⑥ Un poco presto 3:00
- ⑦ Presto agitato 6:00

ピアノ: ジャン=ポール・ヌヴェー

Piano : Jean-Paul Neveu

Live: 21 September 1949



ジネット・ヌヴェー — 伝説のヴァイオリニスト —

“ジネット・ヌヴェー、それは音になった炎、仄暗くも青白く白熱する炎だった。そして今、コクトーの語るように、その銅像の眼は光となってわれわれを天上から見降ろしている”

50年前の1949年10月29日、今世紀の最も優れたヴァイオリニストのひとりであるジネット・ヌヴェーは30歳で飛行機事故により、世を去った。この日を追悼してTAHRAレーベルは、高い芸術的価値のある未発表の録音を取めたCDのリリースを企画した。その実現にあたっては、ヌヴェーの姉であるパレ夫人の協力をいただいた。心より感謝の意を表したい。また、夭折の芸術家の生の声を伝えてくれる貴重なインタビュー2件を掲載した。

ヴァーシャ・ブルジーホダ、ギラ・プスタボ、ユードイ・メニューイン、オシー・レナルディ、ゲルハルト・タシュナーらと共に、ジネット・ヌヴェーは20世紀の天才児の中に間違いなく数えられるだろう。彼女は1919年8月11日、パリに5人兄弟の末っ子として生まれた。著名な作曲家兼オルガニスト、シャルル＝マリー・ヴィドールは彼女の大伯父にあたる。ヴァイオリニストであった母はヌヴェーの最初のヴァイオリン教師であった。レオポール・ベラン国際コンクールの最優秀賞(1929年6月)、パリ・コンセルヴァトワールで1等賞(1931年)を受賞した。天才少女は、ラヴェルの《ツイガース》の演奏によって審査員たちにその才能を認められた。

ヌヴェーはリヌ・タリュエル、ジュール・ブーシュリにヴァイオリンを習い、後にカール・フレッシュに師事(1931-35)、その教えは彼女に大きな影響を与えた。7歳の時にコンセール・コロンスと共演したブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番により音楽界にデビュー、15歳でワルシャワのヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクールのグランプリを獲得、その180名の候補者の中には、かのダヴィッド・オイストラフもいた。そして1930年代末、ベルリンで彼女は初めてのレコーディングを行った。1935年11月6日にオイゲン・ヨッフム指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、1936年10月30日にはフランクフルトでウィレム・メンゲルベルクと共演した。

大戦中はシャルル・ミュンシュ指揮のバリ音楽院管弦楽団と度々共演。1943年6月23日には、パリでヘルマン・アーベントロートの指揮でベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏した。戦後、ヘルマン・シェルヘンはヌヴェーをヴィンターツールに招き、ブラームスのヴァイオリン協奏曲の公演を行い(1945年11月28日)、カラヤン指揮ウィーン交響楽団とも演奏した(1946年5月18、19日と1948年4月17、18日)。1946年8月には、アビーロードのスタジオでブラームスのヴァイオリン協奏曲をイサイ・ドブローウエン指揮で録音した(彼女は前年の1945年11月に、ワルター・ジュスキント指揮のフィルハーモニー交響楽団とともに、シベリウスの協奏曲全曲の素晴らしい演奏をたった一日で録音している。ベートーヴェンとチャイコフスキーの協奏曲の収録計画があったが、残念ながらそれは残された時間

が許さなかった)。1947年10月24、25日には、ボストンでアメリカでのデビューを果たし、ミュンシュ指揮のニューヨーク・フィルハーモニック交響楽団(1947年11月13、14日)、セルゲイ・クーセヴィツキー指揮のボストン交響楽団(1947年12月23日)などのもとで公演を行った。アメリカの新聞、特にニューヨーカー達は称賛を惜しまなかった。

『ヘラルドトリビューン』『ブラームスはジネット・ヌヴェーの虜になったに違いないと私は確信している』(ヴァーゼル・トンプソン)

『ニューヨーク・サン』『彼女はまちがいがなく、聴衆を魅了する確実なリズムと同時に理にかなった熱情をも自らの音楽の中に吹き込むことができる、一流のヴァイオリニストである』(アーヴィング・コロディン)

『ワールド・テレグラム』『音楽の知性と詩情とエネルギー、強烈な個性と感性から創られたパリジェンス。舞台の上で、黒髪と長身が印象的な少女は、威厳のあるステージマナーで聴衆を魅了した』(ロバート・ベイガン)

『ザ・タイムズ』『彼女は、気高いまでに均衡のとれた音楽的着想と感受性によって裏うちされた力強さと情熱をもって演奏した。その激しくほとばしるような演奏は、楽器の持つ力の限界を試しているかのようだ。彼女は指先まで音楽家であり、その演奏は真摯さと強い個性が凝縮されていると同時に、気高いまでの節度を保っている。その精神の淀みのなさは、音楽をさらにドラマティックな時間へと導く。そこでは美しく透明度の高い

精細な音色だけではなく、荒削りの弦さばきや心臓の鼓動をかき乱すようなオクターヴ奏法のパッセージも、思いのままに操られる。このような刺激的なブラームスのヴァイオリン協奏曲をこの街で聴いたのは、何シーズンぶりだろうか。若さがみなぎる情熱と巨匠の威厳と抑制とがともに寄り添うような演奏を」(オリン・ドーンズ)

1948年5月3日、ハンブルクでヌヴェーはハンス・シュミット=イッセルシュテット指揮のもとで



兄のジャン=ポール・ヌヴェーとともに

ラムスのヴァイオリン協奏曲を演奏した(高い技術力の録音その忘れがたい夜の思い出を記録してくれている)。運命の年である1949年は、シカゴでのオーマンディが指揮する3つのコンサートから始まった。6月3日にミュンヘンに戻ったヌヴェーは、バリ音楽院管弦楽団と共演、同19日にはストラスブル音楽祭に出演した。9月2日、サラ・ベルナル劇場で兄のジャンとともにリサイタルを開き、同25日、バーデン・バーデンでハンス・ロスバウトとともにベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を披露した。10月12日から15日まではシベリウスのヴァイオリン協奏曲をジョン・バルビローリ指揮のハレ管弦楽団と共演した。その時の評論には「彼女は豹のような猛々しきで演奏した」と書かれている。10月20日にパリで、彼女の最後となるリサイタルが、いつもどおり兄ジャンと共に開かれた。パンフレットにはこのように書かれている。「ジネット・ヌヴェーのデビューは、かつての天才児たちの中でも燦然と輝くものであり、今日、われわれフランス音楽界での第1人者のひとりに数えられるのは明らかである。また、パリでの数々の成功と近年の海外での活躍は、彼女の

さらに磨きのかかりつつある風格と同時に兄ジャン・ヌヴェーのピアニストとしての才能をも証明している。彼女が1946年3月に行ったリサイタルを忘れる者はいないだろう。そして今回のリサイタルで演奏された、魅惑的であると同時に強烈なブラームスのソナタは、さらに新しい栄光をそこに加えるものである。そして特に注目すべきことは、バッハの〈シャコンヌ〉で彼女が見せた比類ない激情と威厳である」。そして10月29日、アメリカでのツアーに向けてふたりはオルバー空港を飛び立った。数時間後、飛行機はアゾレス諸島の山に激突した。ボクサーのマルセル・セルダンもその便の乗客のひとりであった。

流星のごとく瞬間に花開き、その栄光を約束されていた彼女のキャリアはこの悲劇的な事故により早すぎる終わりを迎えた。わずか30歳のことであった。11月6日、バルビローリの指揮するハレ管弦楽団は、ヴェルディの《レクイエム》を彼女のために捧げた。聴衆はあえて拍手を控えたという。

Inrerview 1 (1949. 3. 5) _____

Q:ヌヴェーさん、あなたがここ数か月で、アメリカや諸外国での演奏旅行で華々しい凱旋を成し遂げたことは周知の事実です。またあなたが近々シャルル・ミュンシュと共演することも知られていますが、あなた自身の口から詳しい説明を聞かせていただけますか?

G:もちろん、喜んで。確かに、私は6月3日にシャ

ール・ミュンシュ氏の指揮でバリ音楽院管弦楽団と演奏する予定です。

Q:あなたのようなソリストとミュンシュ氏のような指揮者の共演とは、まさにアメリカ人がよく言う「センセーショナルな出来事」です。アメリカではすでに共演したことがあるのですよね?

G:そうです。何度かニューヨーク・フィルハーモニックと共演しましたが、すべてシャルル・ミュンシュ氏の指揮でしたから。

Q:あなたが私たちから遠く離れている間に、あなたは非常に興味ある音楽の経験をされたことと思います。私たちがここでお聞きしたいことのひとつは、国の違いによる聴衆の好みの違いについてです。私の思い違いでなければ、アメリカ人の演奏は一般的に言ってヨーロッパよりもテンポが速いのではないですか。

G:2回のアメリカ演奏旅行でフィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、クリーヴランド、ピッツバーグ、ミネアポリス、他にも様々な都市に行きましたが、アメリカについての私の印象は次のように言えると思います。アメリカの聴衆は、以前にも増して、演奏家の個性や、作品の解釈や演奏法に注目するようになってきています。けれど、私の個人的な経験では、どこの国の聴衆も皆、美しいものに対して熱く反応するものです。

Q:作曲家について少し伺いましょう。世界中をまわられて、新しい作曲家や、レパートリーに加えたいような作品との出会いはありましたか?

G:前回のアメリカツアーではアメリカの作曲家の作品を演奏する機会はありませんでした。けれ

ビアメリカの作曲家についてはいろいろと話を聞きましたし、その中のひとりの私が尊敬する、サミュエル・バーバー氏に会うことができました。私はフランスや諸外国の近代や現代の作品を多く演奏しますが、その中でもラヴェル、ドビュッシー、ポーランドの作曲家カロル・シマノフスキ、チェコのヨセフ・スクの名を挙げておきましょう。

Q: ヨセフ・スクの名前が出ましたが、彼について少しお話しただけませんか？

G: もちろん、喜んで！ ご存知のとおり、ヨセフ・スクは1874年、クレチョヴィーチェに生まれたドヴォルザークの教え子でした。その上、彼はドヴォルザークの娘と結婚しています。その作品には師の影響が色濃く反映されています。

Q: それではヨセフ・スクの作品を聴かせていただけようあなたにお願いするよいタイミングですね。われわれの聴衆を喜ばせていただけますか？

G: もちろんです。兄ジャン・ヌヴェーと私とで、ヨセフ・スクの《ヴァイオリンとピアノのための4つの小品》の中の最後の曲、《ビュルレスク》をお聴かせしましょう。

Innerview 2 (1949. 9. 10)

Q: それでは、今回、このエディンバラ国際フェスティバルへの参加で熱い興奮を巻き起こしているジネット・ヌヴェーさんにお話を伺います。あなたがこのエディンバラで演奏されるのは初めてですね。あなたはイギリスでとても人気があり著名でもあるのに、エディンバラの人間はまだあな

たのヴァイオリンの音を聴いたことがありません。G: 確かに、これが私の初めてのエディンバラ国際フェスティバルです。イギリスやスコットランドでは何度も演奏しましたが、このフェスティバルには参加したことがありませんでした。昨年、参加依頼を打診されましたが、あいにく、私はその頃オーストラリアにいたのです。

Q: 確かにそれは少しばかり遠いですね。あなたはバリ音楽院管弦楽団と共演されたほかにも、お兄様のジャン・ヌヴェー氏とともに素晴らしいソナタのリサイタルを開かれています。

G: はい、そのとおりです。

Q: そしてフランクのヴァイオリン・ソナタを演奏されました。

G: そうです。セザール・フランクの《ピアノとヴァイオリンのためのソナタ》I長調と、ドビュッシーやフォーレのヴァイオリン・ソナタも演奏しました。

Q: 聴衆のその3作品への反応は素晴らしいものでした。次はジャン・ヌヴェーさんに伺います。妹さんとの共演はずっと昔からだったのでしょうか。それとも最近からですか。

J: じつは、もう何年も前からふたりで演奏しています。戦争中は外国への演奏旅行ができなかったため、室内楽を中心に演奏活動をしてきたことがきっかけです。イヴ・ナットと共演する特別なコンサートで、私たちがフランクのソナタを演奏することができたということも言うておかなくてはなりません。彼は、言うまでもなく、ウジェーヌ・イザイのヴァイオリンとともに、フランクのソナタの偉大な解釈者です。戦争が終わるとすぐ

に、私は姉に伴って海外の演奏旅行に行くようになりました。室内楽、ソロ・リサイタルに限らず、それは途切れることなく4年間続いています。

Q: ジネットさんに伺います。シベリウスのヴァイオリン協奏曲を選んだのはなぜでしょうか？

G: フェスティバルの主権者側からこの曲を演奏してほしいとの依頼があったのです。この作品はイギリスやスコットランド、そしてスカンジナビア諸国やアメリカでもとてもよく知られている曲ですから。私自身もこの曲を演奏することは大きな喜びでした。私は、イギリスでこの曲をレコーディングをしたのですが、その都度演奏する喜びと、また、新しい自分の演奏を発見するという喜びもありました。

Q: この作品はヴァイオリンのために書かれた素晴らしい作品ですし、ヴァイオリニストにとってはその演奏は非常に魅力的なものでしょうね。

G: そうです。まさにヴァイオリンのために創られた美しい作品です。同時に、オーケストレーションの部分も世界中で聴かれるに値するものだと思います。

Q: あなたが演奏すると、われわれは作曲家にどれほどのものを負っているのかわからなくなるほどです。つまり、あなたの炎のような演奏を聴くと、作曲家と演奏家の境目がわからなくなるのです。もし私がヴァイオリン協奏曲を作ったとしたら、もちろんたいした作品にはならないでしょうが、あなたにぜひ演奏していただきたい。ところで、あなたの好きなヴァイオリン曲は何かと訊ねたくなってきました。

G: 私はもちろん、一般的にいえば、音楽のすべての要素、すべてのメロディの基盤をなしているクラシック音楽が好きです。けれど、フランスやその他の国の現代音楽や近代音楽にも非常に興味を持っています。

Q: ヴァイオリニストとしてのあなたを満足させるような現代の協奏曲はありますか？

G: 特に強い印象を受けて、私を魅了したのはアルチュール・オネゲルの新しいソナタと、有名なウィリアム・ウォルトンの素晴らしい協奏曲です。

Q: あなたはバリではあまり演奏されませんが、何故でしょうか？

G: 私は次々とアメリカや外国から招かれたために、2年の間、バリで演奏することができませんでした。けれど、昨年春には、アメリカから帰ってきた時に、シャルル・ミュンシュ指揮でバリ音楽院管弦楽団と共演することができました。ごく最近には、兄とフランスのソナタを集めた演奏会を開きました。また、今度アメリカに発つ前の10月20日、サル・ブレイエルで1回だけリサイタルを開く予定です。

Q: すぐに日程をメモしておきます。それでは、またお兄様と一緒にリサイタルですね？

G: そうです。演奏予定の曲は、ヘンデル、バッハ、ブームス、シマノフスキ、そしてラヴェルです。

Q: ラヴェルはソナタですか？ それともツイガースですか？

G: ツィガースになると思います。

Q: あなたが演奏されるツイガースをぜひ聴きたいものです。他にはどのような予定がありますか？

G: 10月末に、私と兄はアメリカに4か月間の予定で滞在します。その後、ヨーロッパに戻り、来年の夏までヨーロッパ中で演奏します。それから南アフリカへ行きます。

Q: 素晴らしい。楽しみです。ありがとうございます。また。

(フランス語翻訳: 五島美穂)



profile ————— 河原 融

ジネット・ヌヴェー

Ginette Neveu (1919-49)

1919年8月11日、パリの音楽一家に産まれたジネット・ヌヴェーは、ヴァイオリンの教師をしていた母親の下で幼くしてヴァイオリンを手にし、早くも7歳の時にはサル・ガヴォーでブルッフのコンチェルトを弾いて公式のデビューを飾ったという。そして10歳にしてジョルジュ・エネスコにしばらく教えを受けた後、30年にはパリ音楽院に入學して、ジャック・ティボーの盟友であり、ヘンリック・シェリング、ドゥヴィ・エルリ、ジャンヌ・アンドラード、ミシェル・オークレール、ローラ・ボベスコ、ミシェル・シュヴァルベ、クリスティアン・フェラスといった数多の逸材を育てた名教授ジュール・ブーシェリのクラスで学ぶことを許される。しかもそこでは、87年前のヴィエニャフスキの前例同様にわずか8ヶ月という短期間でその課程を終了して周囲を驚かせた。またパリ音楽院在学中にはナディア・ブーランジェにも就いて学び、作曲にも手を染めている。31年、ウィーンで開かれた国際コンクールに出場するも、この時は第4位に終わった。しかしその機会にカール・フレッシュの目にとまったヌヴェーは翌年その門下に加えられてベルリンへ留学。以後4年間この名教授の下で一層の研鑽を重ねることになる。そして35年、フレッシュの慫慂で、生誕100年を記念して開かれたヴィエニャフスキ・コンクールに出場。今度は圧倒的な評価を得て第1位となる(因に、第3位もヌヴェーと同

ジブーシェリ門下のアンリ・テミアンカ)。この際に彼女に次いで第2位だったのは、誰あろう20世紀を代表するヴァイオリニストとして大成することになるダヴィッド・オイストラフだったが、彼も妻宛の手紙でこの結果への納得を書き送っているほどの勝利であった。そしてヌヴェーはこの大きな成果を足場に国際的なキャリアを歩み始めることになる。ヌヴェー優勝の報に接したティボーはブーシェリ宛に書簡を発し、「ヌヴェーが何よりブーシェリの弟子、即ちフランコ=ベルギー楽派に連なるフランスのヴァイオリニストであって他の何者でもないはずだ」と、今となっては時代を感じさせる素朴な愛国心をさらけ出した熱弁をもって語ったが、皮肉にもヌヴェーの才能に逸早く熱狂したのはやはりドイツであった。ハンブルクでブラームスのコンチェルトを演奏したのを始め、ミュンヘン、そしてベルリンでも大きな成功を収める。36年にはソヴィエト、北米へも演奏旅行に招かれてその国際的な名声は一層高まり、30年代後半のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会にヌヴェーは繰り返しソリストとして登場。そのレコーディング・アーティストとしての活動もベルリンで始まった。第二次大戦が始まるとパリに留まり演奏活動を縮小せざるを得なくなるが、それでも41年にはポール・バレーの指揮でベートーヴェンのコンチェルトを演奏、43年には自らブーランジェに委嘱したヴァイオリン・ソナタを作曲家のピアノで初演したりしている。戦後はロイヤル・アルバート・ホールでのロンドン・デビュー公演を皮切りにイギリスへも繰り返し演奏旅行に訪れ、ヌヴェーに注目したウォルター・レグは早速彼女と専属契約を

締結、シベリウスの協奏曲を始めとするまとまった量のスタジオ・レコーディングが遺されることになった。かくしてヌヴェーのキャリアは戦後の新しい世界の幕開けと共に大きく花開こうとしていたが、49年、4度目のアメリカ演奏旅行に向けて10月20日にパリで「お別れコンサート」を開いた後、パリ音楽院でイーヴ・ナットに学んで同門下の逸材として知られ42年以降は妹の専属伴奏者となって彼女を芸術の深化を支えた兄のジャン=ポールと共に機上の人となった10月28日、そのエール・フランス"コンソレーション"機がポルトガル領アゾレス諸島サン・ミゲル島の山腹に墜落。兄と共に30歳でその生涯を終えた。

ハンス・シュミット=イッセルシュテット

Hans Schmidt-Isserstedt (1900-73)

1900年5月5日、ベルリンのビール醸造所を営む家に産まれたシュミット=イッセルシュテットは、幼い頃、生家に付属するカフェで弾いていた楽士に魅せられてヴァイオリンを手にしたという。長じては音楽家を志してベルリン高等音楽院に入學。さらにベルリン大学ではシュレーカー学長の下で作曲を学び、モーツァルトの初期オペラにおける管弦楽法に見られるイタリア音楽の影響を論じた博士論文で学位を取得。大学時代にはベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のゲネプロに潜り込んでアルトゥール・ニキシュの警咳に接したという。大学を卒業後は先ずバルメン=エルバーフェルト(現ヴッパータール)のコレペティトゥーアとなって音楽家としての一步を踏み出し、同地で「ばらの騎士」を指揮する機会を与えられる。ロストックの歌劇場で第1カベルマ

イスターの地位を得て本格的なキャリアをスタート。さらに当時の前衛的舞台芸術の拠点のひとつだったダルムシュタットのヘッセン州立歌劇場を経て、35年にハンブルク国立歌劇場の首席指揮者となる。大戦末期にはベルリンのドイツ歌劇場の音楽監督に就任し活躍の場を広げたが、シュミット=イッセルシュテットの名を後世に記憶させることになったのは、彼自身が「我が夢のオーケストラ」と呼んだ北西ドイツ放送交響楽団の創設と育成という大戦後の業績であろう。空襲でベルリンの自宅を失い、戦火を避けてハンブルク近郊の村に隠棲していた彼をイギリス占領軍の情報将校が探し出し、新しい放送オーケストラの産婆の役を委ねてきたのである。彼自身の回想によると終戦直後の混乱期に疎開先を占領軍の将校に突然訪問されて緊張したというのが、英米の諜報機関の有していたインテリジェンス能力の高さを考えても、それは杞憂というべきものであった。シュ



ミット=イッセルシュテットはナチ政権下のドイツで、ハンブルクやベルリンの重要なポストを歴任しただけでなく国策レコード会社であったテレフンケンでのレコード制作なども知られてはいたが、彼にはナチ党への入党歴は無かったし、イギリス軍政当局は、シュミット=イッセルシュテットがダルムシュタットやハンブルクでヒンデミット、ストラヴィンスキーといったナチの白眼視した作曲家の作品を積極的に紹介していたことも把握していたであろう。イギリス軍から車の提供を受けたシュミット=イッセルシュテットは、早速占領地に点在する捕虜収容所などを自ら訪れ、回状を回して、大戦末期に戦線に駆り出され捕虜となっていたドイツ各地のオーケストラの奏者達を新しい放送オーケストラへ招集した。そして、シュミット=イッセルシュテットは“ベルリン・フィルとウィーン・フィルを合わせた弦と、アムステルダム・コンセルトヘボウ管とボストン響を更に一段高めた水準の管”を目標にアンサンブルを短期間に目標に恥じぬところまで鍛え上げ、71年に高齢と健康上の理由で首席指揮者の地位を辞するまで26年間の長期にわたってこのオーケストラを率いることになる。また55年から64年の間はストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者をも務めた。73年5月28日、第二の故郷となったハンブルクで死去。

北西ドイツ放送交響楽団 (現:北ドイツ放送交響楽団)
NWDR-Symphonieorchester (NDR Sinfonieorchester
Hamburg)

1956年に北西ドイツ放送が北ドイツ放送 (ハンブ

ルク)と西ドイツ放送(ケルン)とに分離されたことにより、北ドイツ放送交響楽団と改称し現在に至っている北西ドイツ放送交響楽団の前身は、ドイツ敗戦直後の1945年5月初旬、イギリス占領軍の情報将校ジャック・ボルノフ少佐がハンブルクの東にあるエルブマルシュという村に疎開していた一人の元楽長の下を訪れたことに始まる。当時、イギリス軍はハンブルクや周辺のニーダーザクセン、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン両州を占領して軍政を布き、逸早い民生の安定を目指して活動をしていたが、少佐はその音楽部門の責任者としてBBC交響楽団を範とした放送オーケストラの創設を任されており、彼が新しい放送オーケストラの指導を委ねようとして探したのがシュミット=イッセルシュテットその人であった。そして二人は翌月の10日には最初の会合を持ち、問髪を入れずに具体的な相談を始める。そしてその出会いからわずか半年後の11月10日にはハンブルクのムジークハレ(現ライプスハレ)において第1回の定期演奏会が開かれた。1949年にはシュミット=イッセルシュテットに率いられて早くもドイツ国内演奏旅行を敢行。翌年には最初の国外演奏旅行としてパリに、さらに1951年にはエディンバラ音楽祭に招聘されイギリスへとという具合に、その実力に相応しい国際的な評価をも獲得し、またシュミット=イッセルシュテットの広い人脈もあって、フルトヴェングラーを始め、クナッパブツプッシュ、E・クライバー、クレンペラー、フリッチャイ、それにベームといった充実した客演指揮者陣との共演にも恵まれた。シュミット=イッセルシュテットは戦前から同時代音楽のエキスパートとしても知られていたが、1951年以

降、同時代音楽紹介のための企画「ダス・ノイエ・ヴェルケ」が創設され、以後、北ドイツ放送交響楽団はストラヴィンスキー、ヘンツェ、ノーノ、ツイーマン、リゲティなどの作品を次々と初演。1954年3月の、ハンス・ロスバウト指揮によるシェーンベルクの歌劇「モーゼとアロン」の演奏会形式による初演は放送交響楽団ならではの充実した体制の下での記念碑的演奏会となった。また、1961年にはソヴィエト、1963年にはアメリカへもシュミット=イッセルシュテットに率いられて演奏旅行。1971年にシュミット=イッセルシュテットが高齢と健康上の理由で首席指揮者の地位を退いた後、北ドイツ放送交響楽団は、モーシェ・アツモン、クラウス・テンシュテットを経て、82年に当時既に70歳を迎えていたギュンター・ヴァントを第4代の首席指揮者として迎える。ヴァントの厳格な指導に北ドイツ放送交響楽団の優れた演奏能力と高いモラルが相まって、その演奏水準が高い評価を勝ち得るのに時間はかからず、ヴァントとのレコード制作によってその名声は再び国際的なものとなった。ヴァントが楽団の管理部門との行き違いを生じて91年に首席指揮者の地位を辞した後、その地位はジョン=エリオット・ガーディナー、更にヘルベルト・ブロムシュテット、クリストフ・エッセンバッハ、更にクリストフ・フォン・ドホナーニへと実力派によって引き継がれ、現在は2011年に就任したトマス・ヘンゲルブロックがその地位にある。なお、2017年の新本拠地エルブ・フィルハーモニーの開場に合わせて、NDRエルブ・フィルハーモニー管弦楽団へと名称変更がなされる予定。



1. Private archive of Mrs.Barret,sister of Ginette Neveu
2. With Hermann Abendroth, 23rd, 6, 1943
3. With Jean-Paul Neveu and Marcel Cerdan, at Orly Airport 28th, 10, 1949
4. Private archive of Mrs.Barret, sister of Ginette Neveu
5. With Charles Munch
6. Private archive of Mrs.Barret, sister of Ginette Neveu



●ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 77

1878年、45歳のときに作曲されたブラームス唯一のヴァイオリン協奏曲である。長年の辛苦の末にようやく交響曲第1番を完成させた1876年以降、ブラームスは、ともすれば内向的になりすぎ、自らの音楽的感情や思想を効果的に形にする手前で立ち止まってしまうがちな性向から一気に脱却し、1880年まで壮年期の創作のピークを迎える。それはおもに、ブラームスが自らの音楽的感情や思想を十全に表現するための音楽構成上の語法を獲得したことによるところが大きい。すなわち、短い動機からなるいくつかの展開をメロディ風に用いたり、複数の旋律の断片的な要素をちりばめながら、それらに内在する主要動機によって統一を図るといった手法である。

このヴァイオリン協奏曲も、そうした壮年期の特徴をよく示しており、とくに第1楽章の主題構成などには、第1交響曲やこの曲の前年に作曲された第2交響曲で試みられた手法が、さらに巧みでこなれたかたちで用いられ、より自在でのびのびした展開を見せている。もちろん、ヴァイオリンという旋律楽器による古典的な形式の協奏曲であることも影響しているだろうが、そうした伸びやかさが

交響曲の作曲によって培われた独自の音楽語法に基づく楽曲構成と一体となっているところが、この作品の大きな特徴があるとともに、この作品をロマン主義を代表するヴァイオリン協奏曲としている大きな要因となっている。また、この協奏曲が、調性的に同じ交響曲第2番（ともに二長調）が作曲されたのと同じ、ユーゴスラヴィア国境に近いアルスター湖畔のベルチャッハで作曲されたという環境的な要因も曲想に影響しているだろう。

この曲の成立には、当代きっての名ヴァイオリニストであったヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）との交流が深くかかわっていることはよく知られた事実である。しかし、たしかに、ブラームスは、作曲の過程のなかでヨアヒムに助言を求めて手紙をいくつも書き送っているが、それは具体的な助言を求めるよりも、確認作業であったり、自身の作曲過程を報



ヨーゼフ・ヨアヒム

告したりすることのほうが多かった。こうしたところにも時に意気消沈しながらも自身の信念には頑かなブラームスの性格の一面が垣間見える。翌年の1月に、ヨアヒムを独奏者に迎えて初演されたときも、技巧的に難しいことで有名な第1楽章の10度音程の重音奏法の連続部分をはじめ、ヨアヒムは具体的に改変のアドヴァイスをしているのだが、ブラームスはほとんどそれに従わなかった。とはいえ、有益な助言を惜しまなかったヨアヒムには感謝の気持ちも大きかったようで、ブラームスはこの作品を、ヨアヒムにささげている。

第1楽章：アレグロ・ノン・トロッポ 二長調 3/4



ヴァイオリン協奏曲第1楽章、ヴァイオリン独奏の提示部

ソナタ形式。

管弦楽の序奏を持った古典的なスタイルだが、主題構成に大きな特徴を持つ。第1提示部とも言える序奏部冒頭に提示される第1主題のあとに、いかにもブラームスらしいいくつもの断片的な主題的要素が示されるが、そこでは第2主題は現れず、第2主題は主部に入ってから独奏ヴァイオリンによって初めて提示される。

第2楽章：アダージョ へ長調 2/4 三部形式。

ブラームスは、当初これとは別のアダージョ楽章とスケルツォの2つの中間楽章を準備していたが、あとになってこのアダージョ楽章に差し替えられた。

ブラームス自身「弱々しいアダージョ」といった、内省的なアダージョ楽章である。

第3楽章：アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ 二長調 2/4 ロンド・ソナタ形式。

作曲時には「アレグロ・ジョコーソ」という指定だけだったが、ヨアヒムの「ジョコーソ（陽気におどけて）では難しい」という指摘を受けて、「ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ（快活すぎず）」を加えた。ジョコーソというにふさわしい、ジブシー風のロンド主題が特徴的である。

●ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第3番 二短調
op.108

ブラームスは生涯に、《春の歌》の副題で知られる第1番ト長調（作品78）、第2番イ長調（作品100）、第3番ニ短調（作品108）3曲のヴァイオリン・ソナタを残している。いずれも、交響曲第2番が作曲された後の作品である（第1番は前項のヴァイオリン協奏曲の次の作品）。ブラームスはそれ以前にも、1853年頃にイ短調のソナタが書かれ、シューマンはその出版を勧めていたが、その出来に満足せず破棄している。現在残されている3曲は、自身の作曲技法を確立した壮年期以降の作品ということになる。

第3番は、第2番の完成後（1886年）間もなく作曲が開始され1888年に完成された晩年の作品。ブラームスは、交響曲第4番を完成させた1886年以降、1887年の《ヴァオリンとチェロのための二重協奏曲》（作品102）を唯一の例外として管弦楽のための作品を作曲していない。逆に言えば、ブラームスが管弦楽のための作品を作曲した時期の方が限られる。一方で、室内楽作品と歌曲は生涯にわたって作曲している。本質的にブラームスは室内楽の作曲家なのである。

ブラームスのヴァイオリン・ソナタの特徴は、豊かなメロディラインをいくつも持ちながら、それらを旋律楽器であるヴァイリンに過度に依存させず、ピアノに伴奏楽器以上の重要な役割を担わせていることで、それはとくにソナタ楽章において顕著である。これは、協奏曲において独奏楽器が管弦楽と同等の存在感を有していることと同じ手法に基づいている。壮年期以降のブラームスは、どのジャンルの

作品を作曲する場合でも、主題構成とその展開において一つの楽器に依存することはなく、主題を構成するいくつもの要素が持つ音色や響きの重層性を展開する方法を取っているが、ヴァイオリン・ソナタの場合でも、あえてヴァイオリンに伴奏的な役割もあてることで、音楽に深い広がりを与えるだけでなく、スケールの大きな展開を可能にしている。

第3番のソナタは、親しい友人の死の影響などもあり、全2作に比べて諦念の感情が強い作品で、メロディの構成ものちの複雑な展開に耐えうるようにより技巧的になっている。

第1楽章：アレグロ ニ短調 4/4 ソナタ形式。

憂鬱と激情、諦念と内省が交互に展開する、もっとも晩年のブラームスらしい音楽。

第2楽章：アダージョ ニ長調 3/8 三部形式。

内省的で叙情的な音楽が、ヴァイオリンのG線上でうたわれる印象的な楽章。

第3楽章：ウン・ボコ・プレスト・エ・センチメント 嬰へ短調 3/4 三部形式。

諧謔性よりも憂鬱で暗い情感が支配的なスケルツォ形式の楽章。

第4楽章：プレスト・アジタート ニ短調 6/8 ロンド・ソナタ形式。

前3楽章のメランコリーな気分を振り払うような激情が支配的な音楽で、ヴァイオリンの技巧的な使用が目立つ。

（江森一夫）

取り扱い上のご注意●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズなどを付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内側から外周に向かって放射状に軽く拭き取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を添付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

Licensed by Taha

Mastering: Keisuke Saito(Altus Music),
Takao Suga(King Sekiguchidai Studio)
Editorial: Kazuo Emori (amorfo)

©2016 Tomei Electronics "Altus Music" co., Ltd.

All rights reserved Printed in Japan

<http://www.altusmusic.com> / E-mail: altus@altusmusic.com

Distributed by KING INTERNATIONAL INC. (JAPAN)